様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：１５３０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ２２０２２

研究課題名（和文）セルジューク朝進出期におけるビザンツ領アルメニアの社会と文化の変容

研究課題名（英文）Social and Cultural Transformation of Byzantine Armenia Under the Arrival of the Seljuks

研究代表者
仲田　公輔（Nakada, Kosuke）

岡山大学・社会文化科学学域・講師

研究者番号：１０８７２８１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は主にアルメニア語写本コロフォン（奥付）、碑文、歴史叙述等を用い、11世紀のセルジューク朝のビザンツ領アルメニアへの進出過程にアプローチすることで、現地の人々が新たな支配者とどのように関わり、その社会・文化を変容されていったのかを明らかにした。結果、不透明な状況の中でいまだにビザンツとの結びつきを重視する人々がいた一方で、軍事支援を見込めないビザンツに見切りをつけ、セルジューク朝に対して新たな秩序をもたらす存在として期待を寄せる人々も存在していた。文化的状況も政治的状況と結びついており、ビザンツ文化が重視され続けながらも、その影響を排除したアルメニア独自の要素が強調される向きも見られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来の当該時代・地域の研究が上層での支配のあり方を中心に扱ってきたのに対し、本研究は大枠の政治的変動の中での地域社会・文化の変容にも着目する点に学術的新規性がある。加えて本研究の成果は文化やアイデンティティの形成を周辺世界との相互作用の中で考察する重要性を示すものであり、他の境域研究に示唆を与え、比較可能なものになると考えられる。
　社会的意義に関しては、グローバル化の中で異文化の接触と交流の重要性が増す中、過去の文化交流の事例を現在の相対化の視座として持ち出す際の重要なケースを提供する意義があると考えられる。

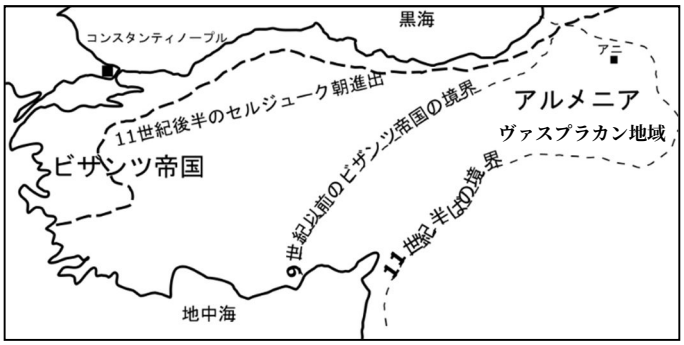
研究成果の概要（英文）：This study tried to reveal the multiplicity of reactions of the Armenian people under the Byzantine rule against the Seljuk incursion in the eleventh century through the analysis of locally-produced Armenian sources, including manuscript colophons, inscriptions and historiographical works. As a result, it became clear that while there were Armenians who had already discarded allegiance to Byzantium, there were also Armenians who still kept ties with Byzantium, since the situation was still fluid at the point of the eleventh century. Their cultural conditions were also strongly correlated with their political attitudes. Some still adopted and adapted Byzantine cultures, while others excluded and emphasised their own ones.

研究分野：歴史学

キーワード：アルメニア　ビザンツ　セルジューク朝　キリスト教　聖遺物

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景



セルジューク朝のアナトリア進出は11 世紀後半の東地中海世界の政治地図を大きく塗り替えた。その焦点となったのが、主要な侵入経路にあったビザンツ統治下のアルメニアである。しかし、この過程にアルメニア現地の人々がどのように関わり、ビザンツの支配やセルジューク朝とどのような相互作用を起こしたのかについての研究は十分ではなかった。たしかに、かつて主張されてきた、セルジューク朝の進出による小アジアの社会構造や文化の退潮というテーゼは、セルジューク朝側の現地勢力との交渉による拡大というモデルを提示したバイハマーの最新の研究に拠って塗り替えられつつある（Beihammer 2017）。しかし、ここでもアルメニア語史料の使用は不十分であり、現地側の声が十分に反映されているとは言い難い。これは決してアルメニア語史料が存在しないためでなく、アルメニア史に関する研究が、アルメニアが独自の政体を失うこの時期について、ネガティヴな評価を下しがちで、あまり着目してこなかったため、新しい研究潮流との接合が不十分なためであった(Bartikyan 1971)。

２．研究の目的

そこで本研究は、現地側の声を拾い上げ、複雑化する情勢にアルメニア現地の人々がどのように関わり、その相互作用が現地の社会や文化にどのような影響を与えたのかを総体的に明らかにすることを目的とした。これまで申請者が行ってきた 10 世紀以前の研究からは、アルメニアの有力者内での利害対立が外部勢力への多様な関わり方にも結びつき、それがさらに外来の文化への異なる反応に繋がり、その受容と拒絶をめぐる様々な反応がアルメニアでの文化活動やアイデンティティの変容に大きな影響を与える可能性が想定できたためである。それを単なる時系列的な発展についての研究に留めず、新たな状況の中での支配者とアルメニアの人々の相互交渉による社会構造の変化を解明し、交流を通してもたらされた新たな文化を、現地の人々が自分たちの文化や浸透過程にあったビザンツ文化に対してどのように位置づけたのかを明らかにすることで、異なるタイプの政治的変動と文化変容の相互作用の過程を明らかにすることをもまた、本研究の重要のテーマであった。

３．研究の方法

本研究の基本的な方針としては、アルメニア現地で作成された様々な類型の史料を用い、2 つの問題にアプローチした。第一に、捨象されてきたアルメニア人側の動向を含めた政治構造の変化の全体像を明らかにすること、第二に、その中での政治的姿勢の変化と結びついた文化・アイデンティティの変容の実態を明らかにすることである。前者については歴史叙述・碑文・写本頃フォン等が、後者については歴史叙述が主要な分析対象となった。海外での調査が行えることを期待して研究期間の延長も行ったが、結局、新型コロナウイルスに関する情勢及び国際政治情勢に鑑みて、十分に安全な状態で調査を行える目処が立たなかったため、刊行資料の収集と分析が研究活動の中心となった。それでもなお、11 世紀から 12 世紀のアルメニアに関しては、セルジューク朝侵入の中での経緯を詳細に伝える『続アルツルニ家の歴史』呼ばれる史料の 4 巻 12 章（以下単に『続アルツルニ家の歴史』と記載する）の重要性に気付くことで、多くの成果を得ることができた（Manukean ed, 2012; Thomson 1985）。この史料は、12 世紀にアルメニア東南部、ヴァン湖周辺のヴァスプラカン地方で作成されたもので、10 世紀に同地方で作成されていたトヴマ・アルツルニ『アルツルニ家の歴史』に付された続篇の一つである。この史料はかねてよりアルメニア教会の地方史の史料としてはよく知られていたが、ビザンツ支配からセルジューク朝への移行期についての政治･社会状況を記す史料としてはあまり重視されてこなかった。しかし、同史料に改めて着目してみると、1021 年頃にそれまでヴァスプラカン地域を支配していたアルツルニ王家が去ってから、新たに台頭した一族が、ビザンツ支配、そしてその後のセルジューク朝の侵入の中で、流動的な状況にどのように対応していたのかを知る手がかりが多く得られることがわかった。

４．研究成果

（1）第一の課題：政治的交渉と地域社会の変化

第一の課題について、セルジューク朝侵入時にビザンツ領とビザンツ領となっていたアルメニア人の現地有力者と侵入者たちとの政治的交渉と地域社会の構造の変化については、従来の見解では現地有力者を取り除いた 10-11 世紀のビザンツ支配がセルジューク朝の侵入を容易にし、

アルメニアに混乱をもたらしたとされてきたが、実態はより複雑だったことがわかった。中長期的視点から捉え直すと、ビザンツ支配はそこまで大きなターニングポイントではなかった。アルメニアはそれ以前からアッバース朝の衰退にともなって出現した様々な地方勢力の侵入を受けていた。その中でアルメニアの有力者たちの一部は、選択肢の一つとしてビザンツ帝国への恭順を選んだのである。その際、彼らがビザンツに求めていたのは第一に安全と軍事的支援だったが、帝国は当初軍隊を送ったものの、その後はむしろ境域防衛のために地元勢力を利用し、間接統治体制を取ることを志向した。一部のアルメニア人有力者たちは安全を求めてビザンツ帝国内地に移住したが、現地に残った有力者も多く、彼らは帝国統治下でも周辺勢力の攻撃に晒され続けることとなったのである。こうした残存有力者について十分な考察がなされてこなかった。

こうした残存有力者は様々な反応を見せたことが、アルメニア語史料から明らかとなった。特に上述の『アルツルニ家の歴史』からは、ビザンツ帝国が 1071 年のマンジケルトの戦いでセルジューク朝に破れ、その支配が後退していく中でも、いまだにビザンツ由来の称号を名のり、ビザンツ側の有力者との姻戚関係を結ぶ（あるいは、少なくとも主張する）など、ビザンツを頼りにした生存戦略を取るものもいたことが見て取られた。軍事的支援を与えない一方で宗教的な統制をはかり、バルカン方面へのアルメニア人の軍事力の転用をはかるビザンツ側に早々と見切りを付けるものもいた一方で、彼らは 12 世紀の半ばにムスリムとの和睦・貢納を行うようになるまで、ビザンツとの結びつきに意味を見出し続けていたのである。趨勢が決定したのは 12 世紀、マヌエル 1 世（在位 1143-1180）の東方政策が挫折し、コーカサスではジョージアが最大勢力となり、ヴァン湖周辺ではムスリムのシャー・アルメン朝が最大勢力となったためであった。この状況で、ビザンツに代わる勢力への帰順を求められたのだと考えられる。新たに拡大した勢力が、ここにきて新たな秩序をもたらす存在として期待されるようになったが、そこに至るまで数十年の流動的な期間があったことがわかった。

（2） 第二の課題：セルジューク朝侵入期のアルメニアの社会・文化の変容

このような不安定な状況の中でのアルメニアの宗教事情は、政治的情勢にも結びついており、さらに複雑な様相を呈していた。この点に関しても、上述の『続アルツルニ家の歴史』から重要な示唆が得られた。ビザンツの影響力が低下したと考えられる 11 世紀後半以降、ヴァスプラカン地方では、アルメニアの伝統に根ざす聖十字架（キリストを磔刑にしたとされる十字架）の崇敬が高まっていた。これは、10 世紀末、ビザンツ帝国の影響力が拡大していた時期においては、同じ聖十字架でも、983 年に皇帝から分与された聖十字架の崇敬が行われていたことに鑑みれば、大きな変化であった。その一方で、983 年にビザンツから受け取った様々な聖遺物が影響力を失ったわけではなかったことが、同史料から見て取れた。それによると、11 世紀後半から 12 世紀前半にかけてヴァスプラカン地域を収めていたアブドルムセフ・アルツルニという名のアルメニア人有力者は、ビザンツの有力者を祖父に持つとされるマリアムという女性と結婚していた。このマリアムは、ビザンツから受け取った聖十字架をはじめとする様々な聖遺物を庇護していたとされる。アルメニア独自の崇敬文化が高まる中でビザンツ由来の聖遺物を重視する慣習が続いていたことから、政治的な側面と同じく、文化的な側面に関しても 11 世紀後半から 12 世紀は移行期だったと考えられる。

以上の研究成果を踏まえ、ビザンツ支配からセルジューク朝支配への移行期のアルメニアについては、中長期的なスパンでその姿社会・文化の姿を変えていったことを想定し、さらなる研究を深めていく必要があると考えられる。

なお、結果的に本研究にとって中核的となった史料『続アルツルニ家の歴史』については、政治史・文化史双方に関しての重要であり、そして周辺分野との関連で考える必要性も高いことから、翻訳・コメンタリーを付した上で刊行することを考えている。

引用文献

Bartikyan, H (1971), ‘La conquête de l’Arménie par l’empire byzantin’, *Revue des études arméniennes* 8, pp. 327–340.

Beihammer, A. (2017), *Byzantium and the Emergence of Muslim-Turkish Anatolia, ca. 1040-1130* (Abingdon and New York).

Manukean, G. ed. (2012), *T‘ovma Arcruni, Patmut‘iwn tann Arcruneac‘*, Matenagirk‘ Hayoc‘, vol. 15 (Antelias).

Thomson, R. trans. (1985), *History of the House of Atsrunik‘* (Detroit).

Vryonis, Sp. (1971), *The Decline of Medieval Hellenism in Asia Minor and the Process of Islamization from the Eleventh Through the Fifteenth Century* (Berkeley).

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 仲田　公輔	４．巻 50
２．論文標題 10世紀におけるアルメニア＝ビザンツ関係と聖人崇敬	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『西洋史研究』新輯	６．最初と最後の頁 30-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 仲田 公輔	４．巻 130-2
２．論文標題 【書評】小林功『生まれくる文明と対峙すること』	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『史学雑誌』	６．最初と最後の頁 85-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 Kosuke Nakada
２．発表標題 Fighting and Negotiating with the Arabs
３．学会等名 Arabs and Arabia in Byzantine Literary Sources（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 仲田 公輔
２．発表標題 10世紀におけるアルメニア＝ビザンツ関係と聖人崇敬
３．学会等名 西洋史研究会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関